『教祖伝』探究（23）

ぢば定め

前おやさと研究所長
深谷　忠一　*Chuichi Fukaya*

『稿本天理教教祖傳』の128頁に、

これさいかたしかさだめてをいたなら
とんな事でもあふなきハない　9―20

とて、世界治めに大切な、かんろだいの据わるべきぢばを、定めて置く事が肝腎である。これさえ定めて置けば、どんな事が起って来ても一寸も心配はない、と教えられた。

とあります。

「ぢば」とは、人間が創造された時、いざなぎのみこと・いざなみのみことの二柱が、「なむなむ」とお宿し込みなされた時の「みのうちよりのほんまんなか」といわれる地点であり、親神天理王命のお鎮まりくださる地点であります。

この「ぢば」は、明治8年6月29日に、教祖が「ぢば定め」によって明らかにされた地点で、当時の住所表示では、大和の国・山辺郡・庄屋敷村・中山五番屋敷といわれた屋敷の一地点、現在では、日本国・奈良県・天理市・三島町一番地の天理教教会本部境内地内の一地点であります。

さて、それで、その「ぢば」を定めることが、なぜ大切だったのでしょうか。

先ず、申せることは、「ぢば」を定めることによって、親神様の時空的限定がなされたということであります。神様は、本来的には時空の中で捉えられるものではありません。もし、神様が時間や空間に制約される存在なら、それは絶対的自由を有しないことになるわけで、神様が人間や他の被創造物と同じ存在になってしまいます。しかるに、また一方、神様が時空の中におられないとなれば、時空の中にしか存在しえない人間には、神様の存在を実感できないことになります。たとえば、“神様は空想の世界の産物”だとか、“人間が観念の遊戯の結果創り出したもの”だなどと批判されても、確かな反論ができなくなってしまいます。

教祖は、天理王命の姿について、「在るといへばある、ないといへばない。ねがふこゝろの誠から、見えるりやくが神の姿やで」（『正文遺韻』266頁）と教えられていますが、「ぢば」に神名をつけられたことによって、時空のなかに存在する親神様を、人間が実感できるようにして下さったのであります。

さらに申せば、「ぢば」は場であって実体ではありません。中山家の屋敷内の一地点（場）を「ぢば」と定められたのであって、（正確に言えば、人間創造がなされた「ぢば」の周囲に中山家の屋敷が構えられた）屋敷内の土や石などの物体に神名をつけられたのではありません。大きな岩や太い木などをご神体・信仰の対象に決められたのではないのです。また、「ぢば」には「かんろだい」が据えられますが、それも「ぢば」がどこにあるのかを示す標識であって、それ自体はご神体・拝む対象ではないのであります。

極論すれば、ご本部の神殿の建物は古くなったり狭くなったりすれば解体や移動されることもあり得るし、その時の様子で「かんろだい」の据わる下の地面の高低を変えたりされることがあるやも知れません。しかし、そこの土（物質）に神名がつけられているのではありませんから、その地点に土が足されて高くなろうが、削られて低くなろうがぢばが変わるわけではない。

（昔、ぢばには小石が積んであって、人々はその小石を頂き、代わりに自分が持ってきた小石を置いていったと伝えられますが、それは「ぢば」の理を小石に託して頂く行為であって、小石に霊力が宿っているということではないのです。かんろだいも同様で、古くなって朽ちてきたりすれば新しいものと取り替えられる。それで、今まで「ぢば」に据わっていたものだから神様だ、などと拝むことはないのです。）

教祖が、「わしや人間は連れて行くことはできても、中山五番屋敷はどうすることもできまいやろうがな」と仰せられたと伝えられるごとくに、誰が来てもどんな事が起きても、不変不滅である場。物質ではないが単なる観念でもない礼拝の目標として、「ぢば」を定められ、人間存在の拠り所を確立されたのが、「ぢば定め」の意義なのであります。

さて、「元の理」のお話によれば、親神様によって人間が創造されたのは、現在のように海山天地が明らかになる以前の泥海の世界でのことであります。ですから、そのお話だけですと、ありきたりの神話のようになってしまい、親神様による人間創造が、事実として認識できなくなりかねません。しかるに、「ぢば定め」によって、創造の事実があった現実の場が示された。しかも、その「ぢば」を定めるに当たっては、教祖をはじめ人間創造の時の道具衆の魂のいんねんある人たちの実在をも明らかにされたのです。

その「ちば定め」の時の様子は、『稿本天理教教祖傳』の128頁以下に詳しく述べられていますが、数人の人たちに目隠しをして中山家の庭を歩かせると、その人たちの足が皆「ぢば」に吸い寄せられて止まった。中に立ち止まらなかった人があったが、その人が娘を背負って歩いたら同じように「ぢば」で足が止まった。というような不思議な現象を見せられて、現実にこの「ぢば」で人間が創造されたということを、私たちに納得せしめられたのであります。

つまり、私たちは、「ぢば」によって人間存在の根拠、創造の事実につながることができる。ですから、「ぢば」を明らかにしておきさえすれば何も心配ない、と仰せられたのであります。

「みかぐらうた」に、

こゝはこのよのごくらくや
わしもはやへまゐりたい　　4－9
こゝはこのよのもとのぢば
めづらしところがあらはれた　5－9

とありますが、極楽というような、元々は彼岸にあると考えられていた場所、現世では存在しえないと思われていた環境が、「ぢば」では現実に存在し得るのであります。

そういう「ぢば」の存在があるゆえに、中山みき様がそこで「月日の社」になられ、たすけ一条の道を始められた。そして、その人間創造の意志が発現した「ぢば」から「さづけの理」が出されるようになった。また、「ぢば」を取り囲んでおつとめをつとめることによって、人類の更生がなされることになったのであります。

別の表現をすれば、「ぢば」は、幽界での人間創造を現世に結ぶ尾、胎内から下界に通じる穴、創造の時が今にワープするホールなどと申せるかと思います。つまり、「ぢば」は天理教信者の信仰の目標としてのみ尊いのではなく、全人類にとって大切ないのちの根源、存在の支点なのであります。